

# Publisher's Review

パブリッシャーズ・レビュー

●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●



## みすず書房の本棚

[無料送付]

No.4 2012 秋

(表示価格は消費税込です)

113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 tel. 03-3814-0131 http://www.msz.co.jp

### 「精神的抵抗」という神話から 音楽を救いだす

細見和之



アウシュヴィッツをはじめとした強制収容所、あるいは絶滅収容所(シリ・ギルバート『ホロコーストの音楽』では「死の収容所」と呼ばれている)において、しばしばナチが音楽隊を組織していたことは、よく知られているだろう。日々移送されてくる政治犯、ユダヤ系の抑留者のなかには、著名なプロやセミプロの音楽家が何人もいて、それらの人びとからたとえば優れたオーケストラを作りあげることが、比較的容易なことだった。ナチはそれらの音楽隊をたんに娯楽の手段としただけではない。抑留者からなる労働隊の出発と帰還に際して、また新たな移送者を迎へ入れるとき、さらには処刑や拷問の最中にも、ナチはそれらの音楽隊に演奏を命じた。恐るべき収容所の機能を維持するうえで、ナチは音楽を徹底して利用したのだ。そのことは、抑留当事者の体験記として

戦後間もなく書かれた、シモン・ラックス/ルネ・クーデー『アウシュヴィッツの音楽隊』(音楽之友社、邦訳初版一九七四年、新版二〇〇九年)などをつうじて、日本でもすでにいくらかは知られているだろう。それに対して、本書『ホロコーストの音楽』の優れた特徴は、ホロコースト下での音楽を、ナチによって組織された音楽隊のみならず、もっと秘かな形で民衆に流布した歌、たとえばユダヤ人パルチザンの抵抗歌にまで探究の射程を拡げ、さらに、ゲットーおよび収容所における人びとの階層差による音楽の機能の差異、という視点を持ち込んだことにあると言える。本書においてはそれが、ワルシャワ・ゲットー(第一章)、ヴィルナ・ゲットー(第二章)、ザクセンハウゼン収容所(第三章)、アウシュヴィッツ収容所(第四章)という四つのケーススタディとして

実現されている。しかも著者は、ユダヤ人の「抵抗」のシンボルとして戦後、人口に膾炙することになるいくつかのパルチザンの歌だけでなく、その場で多くの人びとに歌われながら消えていったとおぼしき歌の発掘にも努めている。必ずしも「抵抗」とは呼べない、たとえばゲットーの悲惨な日常をそのままに歌った歌だ。ナチに対する抵抗が協力的か、そういう二分法にはくっついて収まらないそれらの歌を一つでも多く甦らせること、そこに著者は途方もないエネルギーを注いでいる。なぜなら著者によれば、歌は自分たちの痕跡をほとんど残さなかった集団が、口伝えし、そして保ちつづけた共通の思いや解釈の断片(本書、十九ページ)だからである。著者の努力によって本書には、三十四におよぶ歌の譜面が掲載されている。

音楽はナチ支配下のユダヤ人ゲットーと強制収容所において、どのような役割を果たしたのだろうか。ワルシャワ・ゲットー壊滅前夜の大道芸や合唱団、舞台演芸。アウシュヴィッツのオーケストラ。音楽を使った懲罰や拷問――音楽を手がかりに、ホロコーストの深部と個人の内面への窓が開かれる。本書は若き世代がホロコーストの社会史に新たなパラダイムを拓いたとされる書。

そのような「共通の思いや解釈の断片」を収集するうえで著者が重要な出発点としているのは、音楽を安直に「精神的抵抗」のシンボルへと神話化しない、という態度である。第一章に先立つ序章は「音楽を救う――『精神的抵抗』を超えて」と題されている。この姿勢に私は一瞬、虚を突かれる思いがした。この間私は、ワルシャワ・ゲットーを中心にホロコースト下でのユダヤ人の「精神的抵抗」に焦点を置いて自分なりに研究を続けてきたからである。ワルシャワ・ゲットー研究では最終局面の「武装抵抗」に焦点が置かれがちなのに対して非合法の文化活動や教育活動をつうじた「精神的抵抗」にもっと光をあてたいという気持ちがあったのだが、いずれの態度もその

対象をあらかじめ「抵抗」と規定する、事後の救済的な立場に立った一面的なものにすぎない、というのが著者の厳しい批判である。著者によれば、ゲットー住民や収容所抑留者各層のはなはだしい格差を背景にして、ホロコースト下の「音楽」が私たちに伝えてくれる経験はもつと微細で複雑であって、そういう襞に視線を届かせないかぎり、その音楽を、あるいは音楽的体験を、ほんとうの意味で「救う」ことはできないのだ。そういう著者の姿勢の導きとなっているのは、ブリーモ・レーヴィが説いた「グレイ・ゾーン」という考えである。レーヴィは自らのアウシュヴィッツ体験を踏まえて、強制収容所のような極限的な状況下では、誰も潔白ではありえず、すべての抑留者は絶対的有罪と絶対的無罪のあいだの「グレイ・ゾーン」に置かれていたと語った。著者の探索している歌の多くもまた、その「グレイ・ゾーン」で歌われたのだ。

難と抵抗の「物語」には収斂されない、生死のはざまにある人間の多様で複雑な生と経験である。一方で、ユダヤ人パルチザン、ドイツ人共産党員、ナチ親衛隊はそれぞれ組織の喧伝と結束のために歌唱を利用していった。政治犯囚人と親衛隊員は、人を鼓舞する同じドイツ民謡や労働歌をしばしば愛唱していたのである。

収容所では音楽は異質なものでなく、むしろ運営に不可欠な一部であった。移送されてきた者の「選別」にも、労働への行進にも処刑にも、音楽が伴奏された。生存闘争が最優先する極限状況における闇の部分をも見つけた本書は、ユダヤ人自身のナチへの協力を著したハンナ・アーレントや、収容者の階層化に伴う敵対や憎悪、人間性崩壊へのプロセスを証言したブリーモ・レーヴィらの精神を継ぐ。

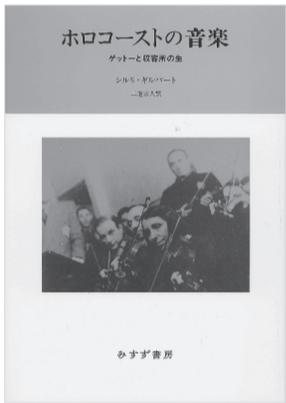
▽『パブリッシャーズ・レビュー』は、東京大学出版会、白水社、みすず書房の三社が発行する無料のタブロイド版出版情報紙です。▽ご送付先の変更のさいは、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードをお知らせ下さい

## 極限状況下の日常に音楽があった

シルリ・ギルバート

《ホロコーストの音楽 ゲットーと収容所の生》

二階宗人訳



難と抵抗の「物語」には収斂されない、生死のはざまにある人間の多様で複雑な生と経験である。一方で、ユダヤ人パルチザン、ドイツ人共産党員、ナチ親衛隊はそれぞれ組織の喧伝と結束のために歌唱を利用していった。政治犯囚人と親衛隊員は、人を鼓舞する同じドイツ民謡や労働歌をしばしば愛唱していたのである。

収容所では音楽は異質なものでなく、むしろ運営に不可欠な一部であった。移送されてきた者の「選別」にも、労働への行進にも処刑にも、音楽が伴奏された。生存闘争が最優先する極限状況における闇の部分をも見つけた本書は、ユダヤ人自身のナチへの協力を著したハンナ・アーレントや、収容者の階層化に伴う敵対や憎悪、人間性崩壊へのプロセスを証言したブリーモ・レーヴィらの精神を継ぐ。

▽『パブリッシャーズ・レビュー』は、東京大学出版会、白水社、みすず書房の三社が発行する無料のタブロイド版出版情報紙です。▽ご送付先の変更のさいは、お名前・新住所・旧住所と、お届けしました本紙の帯封コードをお知らせ下さい

本書はワルシャワ・ゲットーを生き、戦後はソヴィエトの収容所を経験した祖父の思い出に捧げられている。譜面34点やザクセンハウゼン収容所オーケストラの演奏曲目一覧も収載する。『音楽・歴史』(A5判・336頁・四七・二五)

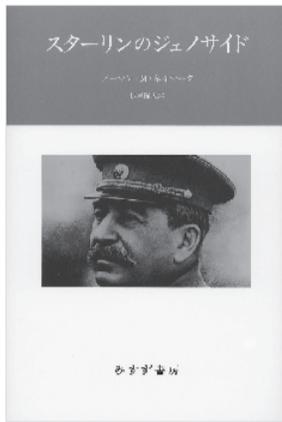
一九三〇年代初頭から一九五三年に没するまで、スターリンは百万人以上の自国民を処刑した。さらに部下たちの指令によって、国の内外を問わず、何百万という人びとが民族・国・宗教・階級などを理由に強制労働、強制移住、虐殺、大飢饉の積極的放置の犠牲になった。その戦慄すべき全体像が、具体的かつコンパクトにまとめられた一冊。

現在でも、三〇年代のソ連の大量殺人を「ジェノサイド」と認めない学者のほうが多いようだ。著者はその原因として、国連「ジェノサイド条約」が成立した時の諸大国の思惑、共産主義イデオロギーを批判することに歴史的な複雑さがあったことを挙げる。いまだに、政治・社会集団を対象にした大量殺人は「ジェノサイド」と認められていないのだ。

ネイマークはソ連・東欧の歴史を専門にする卓越したアメリカの研究者。徹底した資

## 〈カチンの森〉〈大粛清〉はジェノサイドか

ノーマン・M・ネイマーク  
《スターリンのジェノサイド》  
根岸隆夫訳



資料の渉猟をとおして、「定義」自体の見直しを求め、ソ連の複数の犯行をジェノサイドと断定する。ウクライナの飢餓殺人、ポーランドの支配階級の抹殺(カチンの森)、「敵国」民族の強制移住による大量死、富農(クラーク)の撲滅、ソ連権力中枢の大粛清。ソ連のジェノサイドの背後には、つねにスターリン個人がいた。この独裁者の成り立ちを探り、さらにヒトラーのユダヤ人絶滅という公認の「ジェノサイド」と真正面から比較することで、この議論の今日的な意味を問う。「現代史(四六判・200頁・二六二五円)

## リスクとコストのジレンマは解けるか

キヤス・サンスティーン  
《最悪のシナリオ》  
田沢恭子訳 齊藤誠解説

「人間は最悪のシナリオにどう向き合っているのだろうか。無視するのか、過剰に重視するのか。最悪のシナリオが十分に恐ろしいければ、発生確率が実際には低くても、われわれは確率が高くなるに高いのかのように扱おう。これは本当に賢明な考え方なのか? 問題は、最悪のシナリオへの対応が負担とリスクをもたらす可能性があり、その対応自体にも最悪のシナリオが伴うという点だ」(はじめに)

本書の目標は三つ。まず、最悪のシナリオに対して人間が心理学的に振る舞いがちなかを分析する。特に過剰反応と完全無視という極端に振れる心理傾向がリスクへの対処にどのように影響するのかを論じる。第二に、個人と政府は最悪のシナリオについてどうしたらより賢明に考えられるかを、予防原則を精緻化しながら検討する。第三に巨大リスクにおける費用便益分析の可能性と限界を追求する。

壊滅的で取り返しつかない大惨事に、どう対峙すべきか。リスク認知の心理学をふまえて、予防原則と費用便益分析を緩やかに両立させ

## その構造を初めて明らかに

植木あづみ 《生殖技術》



日本で生殖補助医療により一年間に生まれる子どもは約二万人にのぼる。生殖技術がもたらした最大の変化は、生殖を身体から切り離したことで、それによりパートナー以外の精子や卵子による受精や代理出産が可能になった。さらに事態を大きく変えたのは、受精卵が研究材料として注目されるようになったことだ。二世紀の医療として期待される再生医療には受精卵が必要だが、不妊治療の過程で作られた受精卵が研究に使われる道筋がつけられた。できなかったことができるようになる。これが技術の大

不妊治療と再生医療は社会に何をもちたらすか?

## 医学的〈知〉の未来へ導く

ナシア・カミー  
《現代精神医学のゆくえ》  
山岸和典・村井訳

生物心理社会(バイオサイコソーシャル)モデルというものがあろう。人間は生物であり、心をもった存在であり、社会の中で生きていく。生きるものだから、精神医学の医師たちはその三つをつねに考えて患者にあたるべきだという概念である。これは、アメリカを中心に、精神分析あるいは薬物療法、一辺倒のあり方への批判的意味をもっている。しかし実際は、その三つ

## 薬物療法では蔽いきれない深み

野間俊一 《解離する生命》

医療行為としての薬物療法が席巻するいま、解離や境界例の病像をどのように理解し、医師はどう対応すればよいか。精神病理学は絶滅寸前だと言われるが、果たしてそうなのだろうか。メルロ・ポンティの身体論やみずからの「ハイマート」概念を軸に、解離の病態論の歴史とさまざまな症例をつづき、著者は決して薬物

## 代表作10篇、没後編まれた精選論集

W・ブランケンブルク  
《目立たぬもの》  
木村敏・生田孝監訳

「自明性の喪失」などで、人間の精神医学、哲学と精神療法の実践に大きな業績を残したブランケンブルクの、没後に編まれた論文集。心身問題、妄想の現存在分析、精神医学における弁証法的考察などをテーマに、代表的な論文10本を集める。

「われわれは今後もブランケンブルクを読む努力を惜しんでほならない。そこには精神病理学の今後の展開へ向けての、無尽蔵の宝が隠されている」(木村敏)

「目立たぬもの」(科学的な手法をとるといことはつまらぬ、出会いにさらに思考を参加させることにほかならない) (本書より)。

## みすず書房新刊

(2012・5・8)  
東京・文京本郷5  
三三三(三三三)  
(価格は税込です)

## ヘテロトピア通信

上村忠男 サイードら境界知識人の立つ「異他なる反場所」から、言論状況への批判的介入をめざして。思想家の実践。三九〇円

ライファーズ 罪に向きあう 坂上香 ひとと自分の中の牢獄から自由になれるか。米西部の更生団体と、終身刑受刑者の出会いと回復のドキュメント。二七三〇円

境界例研究の50年 笠原嘉隆監訳 笠原嘉隆編 笠原嘉隆・パトリック・テイラー監訳 概念の変遷と研究の歩み。適切な治療距離を重視した臨床経験が生んだ8篇。三七八〇円

《始まりの本》  
政治的ロマン主義 シュミット 決断なき政治の根源にあるロマン主義を徹底検証。全体主義を考へる必須の書。大久保和郎訳 野口雅弘解説 三三六〇円

《始まりの本》  
望郷と海 石原吉郎 シベリアでの8年の収容所体験と戦後日本に著者は何をみたか。生きる意味を求めた比類なき書。岡真理解説 三二五〇円

《始まりの本》  
プロメテウスの火 朝永振一郎 原子力開発と核実験の時代を生きていく。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円

《始まりの本》  
シエイクスピア劇の〈女〉たち 少年俳優とエリザベス朝の大衆文化 楠明子 シエイクスピアの劇では女性の出番はなく、少年たちが女優をこなした。彼らはクレオパトラをどう演じたのか? 三三六〇円

《始まりの本》  
そこに僕らは居合わせた 語り伝える、ナチスドイツ下の記憶 バウゼンアング 全体主義の狂気に「普通の」人ひとりのみこまれてゆくさま。少年少女の目を通して描く。高田ゆみ訳 二二二五円

《大人の本棚》  
安楽椅子の釣り師 露伴、井伏、開高の名作ほか素石や雨村の随筆。野田知、河合雅雄のエッセイなど釣りの妙味を伝える13篇。湯川豊編 二七三〇円

《大人の本棚》  
一葉のポルトレ 拗ね者、頑張り屋、寂しがり。樋口一葉の素顔を知る友人知人が語る肖像。薄田洋策、馬場孤蝶、幸田露伴、小池寛代解説 二五〇〇円

《大人の本棚》  
女の二十四時間 ツヴァイク 女は生涯の内にデーモンに身をまかせていく時がある。女性心理を描く傑作。辻久保訳 池内紀解説 二九四〇円

《大人の本棚》  
シモーヌ・ヴェイユ選集 II 中期論集・労働・革命 労働組合関連の未邦訳記事、書評、長文論考「展望」そして精緻な工場勤務の記録「工場日記」など全12篇。富原真司訳 五〇四〇円

## 動物の環境と内的世界

ユラスキユル 生物進化の二元論から環境世界への多様な適合機能。生物学に認識論的基礎を与えた名著。前野佳彦訳 六三〇〇円

## 自然と権力

ライトカウ 環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円

## 町づくりの思想

森野ゆみ いかにして私たちが社会をつくっていくか。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円

## 自然と権力

ライトカウ 環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円

## 町づくりの思想

森野ゆみ いかにして私たちが社会をつくっていくか。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円

## 自然と権力

ライトカウ 環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円

## 町づくりの思想

森野ゆみ いかにして私たちが社会をつくっていくか。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円

## 自然と権力

ライトカウ 環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円

## 町づくりの思想

森野ゆみ いかにして私たちが社会をつくっていくか。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円

## 自然と権力

ライトカウ 環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円

## 町づくりの思想

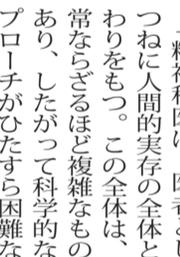
森野ゆみ いかにして私たちが社会をつくっていくか。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円



「人間は最悪のシナリオにどう向き合っているのだろうか。無視するのか、過剰に重視するのか。最悪のシナリオが十分に恐ろしいければ、発生確率が実際には低くても、われわれは確率が高くなるに高いのかのように扱おう。これは本当に賢明な考え方なのか? 問題は、最悪のシナリオへの対応が負担とリスクをもたらす可能性があり、その対応自体にも最悪のシナリオが伴うという点だ」(はじめに)



「リアは十九世紀イギリスの詩人・画家で、子どもばかりでなく大人にも親しまれる詩をどつきり書いた。その多くは「リメリック」と呼ばれる(五行詩)である。これらの詩はこれまで、ラスキンやチャースタートン、オーウェル、T・S・エリオット、オーデナなど、多くのひとに愛されてきた。本書は『ノンセンスの贈物』『ノンセンス・ソング』などの代表作をはじめ、詩人の傑作を精選・集成した魅力的な一巻である。『文学・詩(四六変型272頁・三三三六〇円)



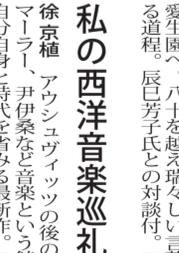
「自明性の喪失」などで、人間の精神医学、哲学と精神療法の実践に大きな業績を残したブランケンブルクの、没後に編まれた論文集。心身問題、妄想の現存在分析、精神医学における弁証法的考察などをテーマに、代表的な論文10本を集める。



生物進化の二元論から環境世界への多様な適合機能。生物学に認識論的基礎を与えた名著。前野佳彦訳 六三〇〇円



環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円



いかにして私たちが社会をつくっていくか。日本社会に具体的な提言と活動をつづける著者が問う硬質エッセイ。二五二〇円



環境をめぐる権力の歴史的特質を描き政策への示唆にも満ちた傑作。屈指の歴史家の名著。海老根・森田訳 七五六〇円

書評コラム

「落語を演ることと精神分析をやること、落語家であることと精神分析家であること。長い間、私はそれらを並べて考えてみたこともなかった。というよりも、自分が落語家になりたいと思っていたことも、思い出さずとすれば思い出せたのだが、あらためて考えてみなかった。私がそういうことをあらためて考えはじめたのは、九〇年代の立川談志の落語に触れるうちに、まことに先祖がえりのように、保育園時代そのままに落語を演りたくなってしまうからである。ついに私は五十年代になって年に二、三回、人を集めて落語を演るようになった。すると再び落語も落語家も他人事ではなくなった。」

故立川談志曰く「落語の主題は、忠臣蔵で仇討に行かず逃げちゃった家来たち。そんな落語の国に生きる、熊さん、八つあん、与太郎、若旦那、市井のアンチヒーローた

甘い、夢のようなお菓子に、生き馬の目を抜く企業戦略、その底流に蠢く創業一族の、何世代にもわたる熾烈なライバル秘話が加われば、面白くないはずはない。加えて、圧倒的な筆力だ。四〇〇頁を超える大著も一気に読めてしまう。

こげ茶色のシンプルな包み紙の板チョコで有名なハーシー社。がつつりかぶりつくチョコレイトバーで有名な、マーズ社。米国のチョコレイト業界を二分してきたこの二大企業は、社風も経営方針も、そして創業者の性格も、すべてにおいて正反対だった。

ハーシータウンと呼ばれる町を作り、工場だけでなく団地や福祉施設

落語を演ること = 精神分析家であること

藤山直樹

《落語の国の精神分析》



ちのあまりに人間のなキャラクターや心理を、気鋭の精神分析家が深く鋭く洞察する。「ところが、そこに死体が登場すると事態は急変する。ほんとうに死体が登場することは、ものすごい恐怖を彼らにかきたる。らくだという人物の死は喜ばしい。しかし、その死体という事実は何よりも恐ろしく耐え難い。(…)

「死」と「死体」の根本的な差異が、ここには端的に描き出されている。人間的な事象としての死と、物理的で具体的に圧倒的な、人間的な事象になる以前の「もの」としての死体。祖父の遺骸の前の十一歳の私を瞬時に引き裂いた、相反するふたつの力が、ここでは順番に出現しているのである。「死と死体のあいだ——らくだ」。

最終章は最愛の落語家立川談志論。そして巻末には立川談春師匠との対談が実現。「落語精神分析」(十一月旬刊) (四六二頁・予価二六、二五〇円)

フランスの雑誌アンケートに答えて、一九九七年にソングはこう言明している——「行進に参加したり、何かを歌ったりする前に守るべき鉄則とは——その場に居合わせる、そこで、じかに、かなりの時間、その国、戦争、不正義、その他の対象について体験していないかぎり、自説を世に問う権利はないということ」。こうして、ソングは戦火の下で悲惨な生活を強いられているサラエボの人々と、ベケットの『ゴドーを待ちながら』の演出を敢行する。ソングは稀有な行動する批評家であったが、それ以外に



行動する批評家のエッセンス S.ソング 《サラエボで、ゴドーを待ちながら》 エッセイ集2 写真・演劇・文学 富山太佳夫訳 待ちながら

もバレエやオペラ、写真にも通曉していた。本書はそうした多面的な批評的エッセイを集めた一巻。「文学・評論」(四六判・312頁・三九九〇円)

北山修 《幻滅論》(増補版) 精神分析の観点から日本人の「へきずな」や「つなかり」の発生を研究するに際し、「古事記」や昔話、浮世絵の母子像や春面に描かれた二者あるいは三者の光景に着目してき



代表作に増補「日本人」という抵抗 北山修 《幻滅論》(増補版) 精神分析の観点から日本人の「へきずな」や「つなかり」の発生を研究するに際し、「古事記」や昔話、浮世絵の母子像や春面に描かれた二者あるいは三者の光景に着目してき

「精神医学・精神分析」(四六判・296頁・二七三〇円)

ソングの真実を探ってゆく。一九九六年版(岩波新書)を改訂、今世紀になってからの九篇を増補した本書を締めくくるのは一昨年のポプ・ディラン来日コンサートの「廃墟の街を聴きながら、四十五年前の発表時とはまったく違う、張りつめた歌の彼方に「アメリカの風景」をみる著者の姿が胸をうつ。

酒井啓子 J.G.ブレナー 《チョコレートの帝国》 笙 玲子訳 を読む



横と独断的経営を生み、時に社を離れざるをえなくなつた幹部がハーシーに引つこ抜かれることも起きる。そのくだりは、あたかも戦国時代の大河ドラマのようだ。対照的な両社は、対外戦

どんな田舎の雑貨屋にも、マーズのスティッカーズが置いてあった。 なにより衝撃的なのが、冒頭で語られる湾岸戦争の際の、両社の対軍売り込み工作である。灼熱の砂漠で戦闘を展開しようという米

外国語大学大学院教授) \*『エコノミスト』6月26日号掲載の書評を抄録しました▽ブレナー『チョコレート』(三九九〇円)

詩人が読むアメリカン・ソング

長田弘

《アメリカの心の歌 expanded edition》



「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

著者は一九七〇年代初頭にアメリカ中西部の大学町で暮らした。その後全米をクルマで走破した。ハイウェイのカーラジオから、東京の自宅で深夜、レコードから流れ出る歌の深く積み重ねた経験が、この本の記述を厚くしている。

「精神医学・精神分析」(四六判・296頁・二七三〇円)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

「チェット・アトキンスのギターはとにかく水際立っている」『チェット&フレンズ』収録リハーサル(著者撮影)

この夏、たくさんの新聞書評をいただきました

マイケル・R. ローズ 熊井ひろ美訳 老化の進化論 小さなメトセラが寿命観を変える 3150円

池谷裕二氏・読売新聞8月12日 東嶋和子氏・北海道新聞7月15日 信濃毎日新聞7月15日 出久根達郎氏・朝日新聞6月24日

ペーター・ツムトア 鈴木仁子訳 建築を考える 3360円 堀江敏幸氏・毎日新聞8月12日 岡田温司氏・読売新聞6月17日

ジョエル・G. ブレナー 笙 玲子訳 チョコレートの帝国 3990円 東京新聞8月5日 武田尚子氏・日本経済新聞7月15日

小池昌代解説 <大人の本棚> 一葉のポルトレ 2520円 「書物の森」東京新聞8月7日夕刊 池内 紀氏・毎日新聞8月5日

高橋悠治 きっかけの音楽 3045円 杉本秀太郎氏・毎日新聞6月24日

石原吉郎 岡 真理解説 《始まりの本》 望郷と海 3150円 <門>氏・毎日新聞8月26日 蜂飼 耳氏・東京新聞8月4日夕刊

朝永振一郎 江沢 洋編 《始まりの本》 プロメテウスの火 3150円 海部宣男氏・毎日新聞7月15日

芥川喜好 時の余白に 2625円 鷺田清一氏・朝日新聞7月1日

三浦哲哉 サスペンス映画史 3570円 中条省平氏・日本経済新聞7月29日

ヤン・ザラシーヴィッチ 江口あとか訳 小石、地球の来歴を語る 3150円 畠山重篤氏・読売新聞8月12日 日本経済新聞6月17日

ポール・ファーマー 豊田英子訳 山本太郎解説 権力の病理 誰が行使し誰が苦しむのか 医療・人権・貧困 5040円 渡辺 靖氏・朝日新聞6月17日

楠 明子 シェイクスピア劇の<女>たち 少年俳優とエリザベス朝の大衆文化 3360円 河合祥一郎氏・日本経済新聞8月26日

岡野八代 フェミニズムの政治学 4410円 上野千鶴子氏・熊本日日新聞7月1日

本書は一九七〇年代半ば、ジュネがひとまとまりのものとしてガリマール社に託した二種の原稿「判決」「私はいた、そして私はいなかった」からなり、生誕百周年のおりに刊行された。なぜこれまで公表されなかったかは不明だが、一九七四年ごろ、ジュネはこんなふうには語っていた。

「私は私の人生について本を書いている。日本に行った旅の話で始まる。私は複雑で入念な形式を選んだ。中央にひとつのテキストがあり、それはそれで続いていくが、余白には別のテキストがいくつもあって、中央のテキストを中断し、延長し、豊かにしていく」(ワンヌース「伝説と鏡のかなたに」鶴飼哲訳)

まさに本書はそのように始まる。そして作家自身の指定による特殊な組版(デリダに『吊鐘』を着想させた六七年

## 40年を経て公刊された草稿

ジャン・ジュネ  
《判決》  
宇野邦一訳



のレンブラント論の発展型)や交替する黒赤二色の文字の連なりによって、サルトルの予言をなぞるかのようにならざるを得ない。遺作『恋する虜』の原型でありつつも、まったく独自の高密度結晶体。「犯罪者」ジュネ総決算の書にして、パレスチナをはじめ世界の抵抗運動に同伴する「証言者」ジュネを始動させた詩的かつ思想的テキストである。草稿写真四色掲載。装帧・菊地信義。【フランス文学・現代思想】十月下旬刊【A5 88頁・予価三九九〇円】

## シリーズ 始まりの本

始原へ立ち帰りたい。何度でも直した古典。新編集・新解説で現代新組新解説

## 生身のカフカを伝える特別な書

グスタフ・ヤノーホ  
吉田仙太郎訳 三谷研爾解説

「冷静は力の表現です。静けさによってまた力に達することができると。これが極性の法則です。静かな忍従は人を自由にします——たとえ処刑を前にしても」。著者ヤノーホは、17歳という多感な年頃にカフカの知遇を得た。以後二人の間では、文学・音楽・美術、そして社会や歴史や人間をめぐる極私的会話が交わされる。青年が「単なる個人を超えて働く私的宗教の偶像」と表わすように、カフカの言葉は深遠だ。刊行以来、生身のカフカを伝える書

## 病いにまといつく言葉の暴力

スーザン・ソナタク 《隠喩としての病い》  
富山太佳夫訳

「隠喩は回避さえすれば距離のおけるものではない。暴露し、批判し、追究し、使いつ果たさねばならないのだ」

結核、癌、エイズ……西洋文化が「病い」をとらえるさい、いかなる表象が動員されたのか。みずからの癌体験をふまえて、病いにまといつく言葉の暴力を浮き彫りに。ソナタクが熟期の透徹した文化批評。【文学批評・現代思想】(四六判) 224頁・三三六〇円

## 《カフカとの対話》

手記と追想「増補版」

として特別の位置にある作品の待望の復刊。【海外文学・文学批評】十月下旬刊【(四六判) 384頁・予価三九九〇円】

## ソヴェト・ロシア史の基本書

エドワード・H・カー 《ロシア革命の考察》  
南塚信吾訳

『歴史とは何か』で知られる西欧歴史学・政治学の大家E・H・カーが、社会における意識性の発展という観点から、知識人の革命としてのロシア革命を論じた。ソヴェト・ロシア史の基本書。目次・ロシア革命——その歴史的意義【(四六判) 272頁・予価三三六〇円】

## 彫刻家の静謐感ただよう作品集

《小林且典作品集》  
ひそやかな眼差し



【展覧会のご案内】  
小林且典  
ひそやかな眼差し  
8月28日-11月25日  
静岡市美術館  
エントランスホール・多目的室(入場無料)

みずから鑄造したブロンズの静物を、自作レンズによってモノクローム写真に収めた作品などを注目を集める彫刻家・小林且典の初期作から最新作までを収録した作品集。東京芸大卒業後、留学先のイタリア・ミラノで伝統的な蠟型鑄造を学んだ小林の静謐感ただよう作品は、柔らかな

【現代美術】九月下旬刊【B5変型136頁・三五七〇円】

## ブルクハルト、ホイジンガを継ぐ

ウィリアム・J・バウスマ 《ルネサンスの秋》  
澤井繁男訳

ヨーロッパ・ルネサンスの最盛期はほぼ衰退期にもあたっていた。国家・宗教・学問・言語、「自己」概念をはじめとして、各分野や世界観がゆるぎ、統一と分裂がある意味では同居していた時代であった。一つの時代の終焉と西欧近代の始まりを、統治者であれ、民衆であれ、知識人であれ、同時代人はどう感じ、考え、何をしようとしていたのか。モンテニニョ、ボダンのパオロ・サルピ、ガリレイ、リチャード・ワッカー、ベン・ジョンソン、シエキクスピア、ホップズ、セルバンテスなどが書き残したものを中心に、類をみない仮説から書き起した、ルネサンス研究の碩学による画期作。ブルクハルト、ホイジンガを継ぐ現代の古典。【西洋史】九月下旬刊【A5判・376頁・六三〇〇円】

## 基本図書限定復刊

10月

哲学・自然科学の基本書5点(計7冊)を、10月上旬に復刊いたします

### コペルニクス・天球回転論

高橋憲一訳・解説 ¥3990

人間知性新論  
G. W. ライブニッツ  
米山優訳 ¥7770

### カルノー・熱機関の研究

広重徹訳 ¥3150

過程と実在  
A. N. ホワイトヘッド  
平林康之訳【全2巻】  
I ¥6300 II ¥5670

### 化学熱力学

I. プリゴジヌ/R. デフェイ 妹尾学訳【全2巻】 各 ¥4725

## みすず書房・最近の重版より

- 夜と霧 新版 V. E. フランクル 池田香代子訳 ¥1575
- 夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録 V. E. フランクル 霜山徳爾訳 ¥1890
- アリアドネからの糸 中井久夫 ¥3150
- 貧乏人の経済学 A. V. パナジー/E. デュフロ 山形浩生訳 ¥3150
- ピダハン——「言語本能」を超える文化と世界観 D. L. エヴェレット 屋代通子訳 ¥3570
- 人類の星の時間 S. ツヴァイク 片山敏彦訳 ¥2625
- 時の余白に 芥川喜好 ¥2625
- 建築を考える ベーター・ツムトア 鈴木仁子訳 ¥3360
- 老化の進化論——小さなメトセラが寿命観を変える M. R. ローズ 熊井ひろ美訳 ¥3150
- プロメテウスの火 《始まりの本》 朝永振一郎 江沢洋編 ¥3150

## みすず美術カレンダー 2013

のご案内



楽器を奏でる辻音楽師

特集は「古代ローマのかたち」。哲学者や詩人が知の饗宴を繰り広げるローマで、かつて古代人たちは、まちや都市を象徴的なパターンと考えた造形したといえます。歴史のかたわらにある古代ローマの日常の「かたち」を集めました。八点収録。卓上用、ハガキ大、ペーパーケース入。

ご希望の方は一部六〇〇円に送料八〇円、計六八〇円分の切手を同封のうえ小社へお送りください。

申し込み下さい(〒113-0033 東京都本郷5-32-21)。複数のご購入はお問い合わせ下さい(電話03-3814-0131)。書店からもご注文になります。(十月中旬発売予定)

本紙三月号でご案内しました宮崎かつゑ「長い道」(今号二面下に広告)が七月に刊行となり、すぐさま書評やたくさんのご感想が寄せられています。『長い道』には料理研究家の辰巳芳子氏との対談が付されていますが、映画『天のこころ』(監督・河邑厚徳、11月3日東京都写真美術館ホール封切)には、宮崎かつゑ氏が出演され、おふたりの出会いの場面が紹介されます。

## みすず書房 営業部だより

『夜と霧』が取り上げられたNHK Eテレ「100分de名著」を「ごらんになりました」でしょうか。八月の四週にわたる放送で大反響となり、池田香代子訳の新版、霜山徳爾訳の版、ともに大増刷になって、著者フランクルの想いを多く読者の手へお届けできました。

『夜と霧』は五十年をこえて読み継がれている名著ですが、ご存じない方はまだまだおいでです。多くのロングセラーは書店店頭からその存在が伝えられてきていると思われませんが、昨今は新刊書の点数があまりに増え、隅に追いやられがちなのが実情です。新刊とロングセラーが店頭で隣りあい、多くの方のお手もとへ届けばと願っています。